

〔講 演〕

ブルックナーの宗教音楽

根 岸 一 美

2022 年 10 月 20 日（木）

こんにちは。ただいまご紹介いただきました、根岸一美と申します。私はちょうど一週間前の木曜日に後期高齢 2 年生となりまして、疾うに勤務先もなく、今までの研究生生活の延長線で文献を読んだり、Zoom で昔の教え子～とはいえ今では大学の先生になっているような方々～と研究会を催したり、ごくたまに原稿の依頼を頂いたり、といった日々を送っています。

教会生活では日本基督教団箕面教会に属しておりまして、月に 1 回程度、礼拝の奏楽を担当しています。

さて、さっそく本題に入りましょう。

アントン・ブルックナー（Anton Bruckner）は 19 世紀のオーストリアの作曲家です。1824 年 9 月 4 日、ウィーンから見てドナウ川の上流の地域のリンツという都市に近い、アンスフェルデンという村に、12 人兄弟の最初の子供として生まれました（無事に育っていったのは彼自身を含めて 5 人だったそうです）。1824 年というのは日本では文政 7 年、第 11 代将軍徳川家斉の時代で、翌 1825 年には「異国船打払令」が布告されましたから、鎖国政策が危ぶまれてきた時期にあたっています。亡くなったのは 1896 年（明治 29 年）10 月 11 日、ウィーンにおいてでした。

この 72 年の生涯において、大きな分岐点になったのが、1868 年 10 月、ウィーン楽友協会音楽院に音楽理論（和声学、対位法）およびオルガン担当の教授として着任したことです。日本では同年同月の 23 日（ただし旧暦では慶應 4 年 9 月 8 日）に「慶應」から「明治」へと「改元の詔」が発布されたのですから、まさにブルックナーの後半生は明治時代の前半にほぼ重なっていたということになります。なお、彼の音楽院での教え子にルードルフ・ディットリヒ（Rudolph Ditttrich, 1861-1919）という人がいまして、彼は 1888 年（明治 21 年）11 月、前年に設立された東京音楽学校（音楽取調掛の後身、東京藝術大学音楽学部の前身）に初代の外国人教師として、また「技術監督者」として任命され、6 年間にわたって日本における洋楽教育の基礎を築きました。したがってブルックナーの指導したものが、音楽家を目指す日本の若者

たちに間接的に伝えられていったといえるかもしれません。

さて、大規模な交響曲で知られるブルックナーは、敬虔なカトリック教徒として数多くのキリスト教音楽を作曲しています。種類としてはいずれもラテン語の歌詞によるミサ曲とモテット、ドイツ語の歌詞によるカンタータと詩編の音楽、それにいくつかの小さな器楽作品を挙げることができます。その数は全体として 60 曲ほどですが、本日はそれらの中から 7 曲を選んでお話ししたいと思います。

1) 《Pange lingua パンジェ・リングァ（誉めよ、舌よ）》WAB 31

Pange lingua gloriosi corporis mysterium, sanguinisque pretiosi,

誉めよ、舌よ、栄えある御体の、そして尊き血潮の秘蹟を。

quem in mundi pretium fructus ventris generosi rex effudit gentium.

気高き胎の実にして世界の王なるお方が、この世の贖いのため注がれたる血潮の秘蹟を。（訳：根岸一美 以下同様）

ブルックナーの父親は小学校の教師でしたが、貧しい収入を補うために、結婚式や舞踏会でヴァイオリンを弾いたり、朝は 4 時から 5 時までの間に起きてミサのための鐘を鳴らしたりしなければなりませんでした。アントンはその父親から音楽の最初の手ほどきを受けたのですが、音楽への著しい興味と才能を示してきた彼にたいして、父親は自分より優れた教師が必要と考え、11 歳になったころに、息子をリンツ近郊に住むヨハン・バプティスト・ヴァイスのもとに送ったのです。ブルックナーは自分の従兄にあたるこの人物から、通奏低音奏法やオルガン奏法を学び、一般の科目についても指導を受けたのでした。

本日最初に取り上げる《Pange Lingua パンジェ・リングァ [誉めよ、舌よ]》WAB 31 は、その頃にかかれ、現存するブルックナーの最初の作品となりました。しかし作曲者は晩年の 1891 年 4 月 19 日、旧譜に連続 5 度などの〈禁則違反〉があったことから、改良譜を作成しています。なお WAB は Renate Grasberger による『アントン・ブルックナー作品目録 Anton Bruckner Werkverzeichnis』（1977 年）における作品番号を示しています。歌詞はトマス・アクィナスの作とされますが、この曲については、6 節からなる原詩の第 1 節のみが記されています。本日は～まだ CD 等を入手していないため～改良譜〔譜例 1〕を（ハ長調からト長調に下げて）ピアノを弾きながら歌ってみます。

譜例 1

Pange Lingua WAB 31 (1891.4.19 改良譜)

Anton Bruckner

Langsam

Pan - ge lin - gua glo - ri - o - si cor - po - ris my - ste - ri um, san - gui - nis - que

pre - ti - o - si, quem in mun - di pre - ti - um fru - ctus ven - tris ge - ne - ro - si

rex ef - fu - dit gen - ti - um, , rex ef - fu - dit gen - ti um.

2) エクアール第 1 番 (Aequale No.1) WAB 114

ブルックナーの父親は 1837 年 6 月、ブルックナーが 12 歳のときに、亡くなりました。そのため、母親は彼を聖フローリアンの修道院（ローマ時代の戦士で殉教者のフローリアヌスの名に由来し、その墓の上に立てられたと伝えられている）に連れて行き、合唱児童として引き取ってもらい、当地の国民学校に転校させたのでした。ブルックナーは修道院オルガニスト、アントン・カッティンガーの指導のもとにオルガンの演奏技術を高めていき、他の音楽家たちからも通奏低音奏法、声楽、ヴァイオリンなどのレッスンを受けていきます。そして 1839 年、15 歳になる年に、国民学校を卒業したのですが、父親と同じように教師になることを志し、リンツの教員養成学校にて 1 年間学びます。こうして教師の免状を得たブルックナーは、最初にチェコとの国境に近いヴィントハーク、次いで聖フローリアンに近いクローンストルフの小学校に勤めた後、1845 年、聖フローリアンの母校に「教区学校第一系統助教師」として

迎えられます。彼はこの学校に 1855 年まで勤めたのですが、その間再びカッティングの指導を得てオルガンの演奏技術を磨き、1850 年には修道院の「暫定オルガニスト」に、翌 51 年には正式に「修道院オルガニスト」として任命されたのでした。

ここで、その頃に作曲された器楽アンサンブルの短い曲を紹介しておきましょう。1847 年 1 月に書かれた 2 つの《エクアーレ Aequale》のうち、ハ短調の曲です。3 本のトロンボーンのための作品で、実はベートーヴェンも 4 本のトロンボーンのための 3 つの《エクアーレ》を書いています。「エクアーレ」はすべての声部がコラルのスタイルで「イコール」つまり「等しい」歩調で進行してゆく曲という意味ですが、例えば葬儀の後の埋葬式の際や、故人を偲ぶ催しの際に賛美歌の伴奏としても用いられ、後の交響曲における金管コラルのスタイルの源となったことも指摘されています。

CD: Carus 83.151 “Anton Bruckner Ave Maria” 以下、3)～6) も同じ。

3) 讃歌《Pange lingua 誉めよ、舌よ》フリギア旋法 WAB 33

第 1 節 歌詞は、1) に同じ。

第 2 節 (原詩第 5 節)

Tantum ergo sacramentum veneremur cernui,

それゆえ我らはひれふし、かくも大いなる秘蹟を誉めたたえよう。

et antiquum documentum novo cedat ritui:

かくて古き教えは新しき典礼に道を譲り、

praestet fides supplementum sensuum defectui.

信仰は弱き者に知恵の助けを与える。

第 3 節 (原詩第 6 節)

Genitori, genitoque laus et jubilatio,

創ったお方 [父なる神] と、創られたお方 [子なるキリスト] に、誉れと喜びが、

salus, honor, virtus quoque sit et benedictio:

幸いと名誉が、そして力と祝福があるように。

procedenti ab utroque compar sit laudatio.

そしてこの二者から出られたお方 [聖霊] にも、おなじく賛美があるように。

Amen.

アーメン。

教師としての勤めを続ける傍ら、オルガン演奏の力量をますます高めていったブル

ックナーに、1855 年の終わりに翌年にかけて、大きな転機が訪れます。すなわち、リンツの大聖堂ならびに市教区教会のオルガニストに任命され、ウィーンに移るまでの 12 年間で、この上部オーストリア（Oberösterreich）の中心都市で過ごすことになったのです。これは教師から職業音楽家への大きな転身ということになります。

リンツでは、交響曲作曲家としてのブルックナーの初期の成果が見られるのですが、彼は当地の男声合唱団「フロージン（楽しい気分の意）」に所属したこともあって、世俗合唱曲もかなり多く書いています。しかし中心はやはりミサ曲などの宗教音楽作品でした。5 曲ほど書かれたミサ曲はいずれも大規模ですので、本日はモテットと総称されるミサ典礼用の小曲の中から、1868 年に作曲された、もう一つの《パンジェ・リングァ》を聴いてみましょう。この曲の自筆譜には 1868 年 1 月 31 日との日付があり、まだリンツにいた最後の時期の作品となります。

この《パンジェ・リングァ》では、トマス・アクィナスによる原詩のうち、第 1 節、第 5 節、第 6 節が用いられ、「賛歌 hymnus」として、同じ旋律が繰り返される有節形式のかたちで書かれています。

「パンジェ・リングァ」は、とりわけ歌詞の冒頭の内容から「聖体の祝日」（三位一体の祝日〔聖降臨祭日曜日の次の日曜日〕のあとの最初の木曜日）、すなわち復活祭の 60 日後にあたる日のための曲として定められています。なお、第 3 節（原詩第 6 節）の歌詞のうち、*procedenti ab utroque compar* の部分については、「両者から *ab utroque*」「等しく *compar*」「出られた方に *procedenti*」ということで、聖霊が父なる神からだけでなく、子なるキリストからも発出された方であるという信仰を語っているように理解することができましょう。このことは「ヨハネによる福音書」第 14 章 26 節のイエスの言葉「しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」や同第 15 章 26 節の「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき」（『聖書 新共同訳』）に由来すると思われます。また『讃美歌 21』の 93「礼拝文」に含まれている「ニケア信条（ニカイア・コンスタンティノポリス信条）」（147 頁）には「聖霊は主、いのちの与え主であり、父（と子）から出て」とあるように、括弧付きながら聖霊が「子からも」出ていることが記されています。この「子からも（フィリオクエ）」については、古より、大きな議論があったことが知られていますが、詳しくは土井健司先生監修の『1 冊でわかるキリスト教史』（2018 年、日本キリスト教団出版局）の 71 頁（第 2 部「中世」（久松英二先生）の第 3 章「中世キリスト教の全盛」）を参照されるようお勧めしたいと思います。

4) 《Ave Maria アヴェ・マリア》 WAB 6 (1861 年)

Ave Maria, gratia plena, Dominus tecum.

ようこそマリア、恵みに満たされた女よ、主があなたと共におられます。

Benedicta tu in mulieribus

あなたは女たちの中で祝福された方、

et benedictus fructus ventris tui, Jesus.

そしてあなたの胎の実も祝福されています、イエスよ。

Sancta Maria, mater Dei,

聖なるマリア、神の母君よ、

ora pro nobis peccatoribus,

我ら罪びとのために祈りたまえ、

nunc et in hora mortis nostrae.

今も、そして我らの死の時も。

Amen.

アーメン。

《アヴェ・マリア》は《パンジェ・リングァ》WAB 33 よりも 7 年前の 1861 年 3 月に書かれた曲です。ブルックナーは、聖フローリアンの教師を務めていた頃から、ウィーンの音楽理論家ジーモン・ゼヒターのレッスンを受けていたのですが、1861 年 3 月にその修業が終了し、5 月、そのことへの感謝の思いからこの曲を書いたのです。歌詞は「ルカによる福音書」の第 1 章の、受胎したマリアへの天使の祝福の挨拶「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」(28 節)、ならびにマリアの挨拶を聞いたエリサベトが「聖霊に満たされて、声高らかに言った。『あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。』」(41-42 節)に基づいています。ただし、聖書のこれらの個所には「マリア」の名も「イエス」の名も記されていません。それらの名が公式に採用されたのは『ローマ聖務日課 *Breviarium romanum*』(1568)』からだそうです(吉村 恒編『宗教音楽対訳集成』(2007 年、国書刊行会 170 頁参照)。

ブルックナーには実はほかにも同じ歌詞による 2 つの付曲(WAB 5, 7)があり、いずれも「柔らかい」とされるへ長調で書かれ、Jesus の名が 3 度ずつ呼ばれ高揚してゆくなどの共通点がありますが、ブルックナーの《アヴェ・マリア》といえ、まずはこの WAB 6 をさしており、敬虔な思いと清純なア・カペッラの響きに満たされた合唱の名作とされています。

5) 《Os justi 正しい者の口は》リディア旋法 WAB 30 (1879 年)

Os justi meditabitur sapientiam,

正しい者の口は知恵を語り、

et lingua ejus loquetur judicium.

そして彼の舌は公義を述べる。

Lex Dei ejus in corde ipsius

神の掟がその心のうちにある者は

et non supplantabuntur gressus ejus.

その歩みが揺らぐことはない。

Alleluja.

アレルヤ（主を誉めたたえよ）

聖フローリアン修道院においてとりわけ重んじられていた聖アウグスティヌスの祝日（8 月 28 日）のための作品で、同修道院の聖歌隊長イグナツ・トラウミーラーの依頼により、1879 年 7 月に作曲され、彼に献呈されました。トラウミーラーは「セシリア主義」の厳格な信奉者で、グレゴリオ聖歌とパレストリーナ時代のポリフォニー教会音楽の純粋な姿を重んじており、ブルックナーは彼のためにこの方針にかなう作品を書いたのです。そして彼に楽譜〔譜例 2〕を送ったさいに添えた手紙（1879 年 7 月 25 日付け）には、「[この曲には] 嬰記号（#）も変記号（b）も、七度上の〔音階の第 7 番目のシの上に形成される〕三和音もなく、四六の和音〔下からソドミのように、基礎の音と、その上に 4 度と 6 度の音程をなす 2 音が重ねられた和音〕も、四〔つの、音階的に異なる音からなる〕和音、五和音もありません」とのコメントが記されています。歌詞は詩編第 37 篇（ブルックナーが用いたラテン語聖書では第 36 篇）の第 30・31 節に由来しています。

譜例2

Os justi

Anton Bruckner

Alla Capella

Soprano
Alto
Tenor
Bass

Os ju-sti me-di-ta-bi-tur sa-pi-en-ti-am, os ju-sti me-di-
Os ju-sti me-di-ta-bi-tur sa-pi-en-ti-am, os ju-sti me-di-
Os ju-sti me-di-ta-bi-tur sa-pi-en-ti-am, os ju-sti me-di-ta-bi-tur
Os ju-sti me-di-ta-bi-tur sa-pi-en-ti-am, os ju-sti me-di-ta-bi-tur

1)
S. ta-bi-tur sa-pi-en-ti-am,
A. ta-bi-tur sa-pi-en-ti-am, et
T. sa-pi-en-ti-am,
B. sa-pi-en-ti-am,

6) 《Christus factus est キリストは従順であられた》 WAB 11 (1884 年)

Christus factus est pro nobis obediens

キリストは我らのために従順であられた、

usque ad mortem, mortem autem crucis.

死に至るまで、それも十字架の死に至るまで。

Propter quod et Deus exaltavit illum

それゆえに神は彼を高く上げられた

et dedit illi nomen,

そして彼に名を、与えられた、

quod est super omne nomen.

あらゆる名にまさる名を。

聖週間（受難週）のミサのための音楽です。クローンストルフ時代のミサ曲（WAB 9）の第1曲のほかに、1873年に書かれた二短調の WAB 10 もありますが、もっともすぐれているのが、1884年5月に書かれたこの作品で、CDなどに収録されているのはたいていこの曲です。一般に邦題では《キリストはおのれを低くして》として知られていますが、歌詞は新約聖書「フィリピの信徒への手紙」第2章第8・9節に由来しています。『聖書 新共同訳』で読んでみますと、「(キリストは=6節)へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」と記されています。

しかし、ブルックナーの曲においては、伝統的なグレゴリオ聖歌の歌詞が用いられており、そこには、聖書にはない *pro nobis*（私たちのために）という言葉が含まれ

譜例3 Christus factus est (WAB 11)

Anton Bruckner

Moderato, misterioso

Soprano
Alto
Tenor
Bass

Christus factus est pro nobis obediens, obediens, obediens

Christus factus est pro nobis obediens, obediens, obediens

Christus factus est pro nobis obediens, obediens, obediens

Christus factus est pro nobis obediens, obediens, obediens

dim. sempre

pp

f

S. e-di-ens ob-e-di-ens us-que ad mor-tem, mor-tem

A. - di-ens us-que ad mor-tem, mor-tem

T. ob-e-di-ens, ob-e-di-ens us-que ad mor-tem, mor-tem

B. - di-ens us-que ad mor-tem, mor-tem au-tem cru-

16

dim.

pp

S. au-tem cru-cis,

A. au-tem cru-cis,

T. au-tem cru-cis.

B. - - - - - cis.

ています。これを加えて読み直しますと、「キリストは、私たちのために、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」となります。そして、「私たちのために」という言葉が添えられることによって、これら2つの節は、単にイエスの生き方と信仰を記述するのみならず、信仰者にとっての信仰告白的な意味合いを帯びてきていると思われるのです。

この曲はさきほどの《Os justi》と比べてみますと、いつものブルックナーらしく、複雑な和声と、転調とに満ち溢れていますが、その構成は、以下に示しますように、歌詞の内容と深く対応していることがわかります〔譜例3、4 参照〕。

譜例4 Christus factus est T. 51 ~ 65

51 *p poco a poco cresc.* *f cresc.* *ff*

Soprano: su - per, su - per o - mne no - men,

Alto: *f cresc.* quod est su - per o - mne no - men.

Tenor: *p poco a poco cresc.* *f cresc.* *ff* su - per, su - per o - mne no - men.

Bass: *p poco a poco cresc.* *f cresc.* *ff* su - per, su - per o - mne no - men.

fff *dim.* *p*

S. quod est su - per o - mne no - men, o -

A. *fff* quod est su - per o - mne no - men, o -

T. *fff* quod est su - per o - mne no - men,

B. *fff* quod est su - per o - mne no - men,

p *pp*

S. - mne no - men,

A. - mne no - men,

T. o - mne no - men,

B. o - mne no - men, quod

- ① 曲の始めは「Christus factus est pro nobis キリストは私たちのために〔従順で〕あられた」と低い音域で厳かに歌われ、キリストが人として、この地に生まれたもうたことを暗示する。
- ② その中で「私たちのために pro nobis」のところでは、和音の揺れがあり、クレッシェンド、次いでディミヌエンドにより、この言葉が強調される。
- ③ 次に「従順な obediens」という言葉が、鋭い複付点のリズムで繰り返し歌われ、従順であるということが、実は強い定めであり、さらに決意の表れであることが示される。
- ④ しかし、その従順は死に向かったの下降の歩みであることが、第 9 小節からの、ゼクエンツと呼ばれる同じ形を反復しながら音の高さを変えていく動きで示される。
- ⑤ そして、うなだれるように静まって第 11 小節の、冒頭よりも低いハ音に降り、ピアノッシモで繰り返される。
- ⑥ しかし第 11 小節から第 12 小節にかけてクレッシェンドが加わり、またディミヌエンドとなって、「死に至るまで ad mortem」という歌詞が強調される。
- ⑦ 第 13 小節から第 15 小節にかけては、バスだけの動きとなり、フォルテで歌われる。最低音であるヘ音までの、この下降の動きは、あたかも冥界に降りてゆくような、イメージをもたらす。そして、再び 4 声で「死に、しかも、十字架の mortem autem crucis」と歌われるが、その後におかれた総休止（第 20 小節）は、まさに沈黙であり、死を表している。
- ⑧ しかしそのような低みにおかれたキリストが、今度は高められていくことが、以下に上昇しながら繰り返される楽句によって印象深く描き出されていく。そして第 51 小節からは上昇の動きが最高音のイ音に達し、三重のフォルテで歌詞が最大限に強調され、神がキリストに「あらゆる名にまさる名 nomen quod est super omne」を与えられたことが力強く表現される。

7) 《Psalm 150 詩編第 150 篇》WAB 38 (1892 年)

(歌詞の日本語訳は『聖書 新共同訳』による。)

Halleluja!

ハレルヤ。

Lobet den Herrn in seinem Heiligtum.

聖所で神を賛美せよ。

Lobet ihn in der Feste seiner Macht.

大空の砦で神を賛美せよ。

Lobet ihn in seinen Taten.

力強い御業のゆえに神を賛美せよ。

Lobet ihn in seiner großen Herrlichkeit.

大きな御力のゆえに神を賛美せよ。

Lobet ihn mit Posaunen,

角笛を吹いて神を賛美せよ。

lobet ihn mit Psalter und Harfen.

琴と豎琴を奏でて神を賛美せよ。

Lobet ihn mit Pauken und Reigen,

太鼓に合わせて踊りながら神を賛美せよ。

lobet ihn mit Saiten und Pfeifen,

弦をかき鳴らし笛を吹いて神を賛美せよ。

lobet ihn mit hellen Cymbeln,

シンバルを鳴らし神を賛美せよ。

lobet ihn mit wohlklingenden Cymbeln.

シンバルを響かせて神を賛美せよ。

Alles, was Odem hat, lobe den Herrn.

息あるものはこぞって主を賛美せよ。

Halleluja!

ハレルヤ。

先に取り上げた《Os justi》は、歌詞に詩編が用いられた、ラテン語のモテットでしたが、ブルックナーの宗教音楽作品の中にはドイツ語訳の詩編を歌詞として書かれた作品が、5つあります。篇番号の若い順から言いますと、第22篇（ヴルガタ訳に基づく番号。ヘブライ語原典に基づく現行の多くの聖書では第23篇）、詩編第112篇（同113）、詩編第114篇（同116の1～9節）、詩編第146篇（同147の1～9）、そして第150篇となります。

《詩編150篇》は、今まで取り上げてきたような典礼用、あるいはそれに準じた曲ではなく、1892年のウィーン国際音楽演劇博覧会の開幕コンサートのために委嘱された作品ですが、実際にはいろいろな経緯から、同年11月に開かれたウィーン楽友協会演奏会で初演されました。その意味で、純粹に信仰の発露としての性格は乏しく、まさに力強いオープニングミュージックとして意図された曲といえます。ソプラノの独唱と混声4部合唱にオーケストラが加わる、演奏時間9分ほどの短い曲です。

が、「ハレルヤ」に始まり、それと同じ意味の「Lobet den Herrn (ihn) 主を（彼を）ほめたたえよ」という言葉が行ごとに繰り返され、やがて「角笛」「琴」「竖琴」「太鼓」「弦」「笛」「シンバル」と、楽器の名前があげられる場面がつづき、晴れやかに勢いを増してゆきます。曲の後半は、歌詞が「息あるものはこそぞって 主を賛美せよ」となって柔らかに歌われ、途中にはソプラノ独唱が短く彩りを添えます。そして曲の最初の部分が再現した後、力強いフーガとなります。それではブルックナーによる《詩編 150》を聴いてみましょう。

（使用 CD: Deutsche Grammophon STEREO 423 127-2 Anton Bruckner Geistliche Chorwerke ソプラノ：マリーア・シュターダー、合唱：ベルリン・ドイツ歌劇場合唱団、管弦楽：ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、指揮：オイゲン・ヨーフム）

以上、ブルックナーの宗教音楽について、いくつかの小曲を取り上げてお話しさせていただきました。それらの作品は、日本ではあまり演奏される機会は多くないと思われませんが、彼の生涯における主要なジャンルとなった交響曲との関連も深く、両者の間にはとりわけ和声や強弱等の表現の扱いにおいて、さまざまな共通点が見いだされます。その意味で、ブルックナーの交響曲を深く理解するためには、これらの宗教音楽作品の理解がきわめて重要といえましょう。

ご清聴有難うございました。